空間・社会・地理思想 24 号，101-116 頁，2021 年
Space, Society and Geographical Thought

移民とジェントリフィケーション

ジェフリー・ドゥヴェルトゥイユ *
（松尾　卓磨 **、上田　光希 ***、朱澤川 *** 訳）

Geoffrey DeVerteuil
Chapter 25. Immigration and Gentrification
In *Handbook of Gentrification Studies*, edited by Loretta Lees and Martin Phillips, 2018, pp.428-443.
Copyright © 2018 by Loretta Lees and the Author
Reprinted by Permission of Edward Elgar Publishing Limited.

1．はじめに

移民 immigration とは、特定の国から移動することではなく、「意図的に国境を越えて」特定の国へと移動することを指している。そして、一度国を出ると二度と戻らないケースもあるが、母国との（国境を越えた）結びつきは強固に維持されている（Waters, 2009: 297; Boyle, 2009）。一方、移住者 migrant は居住地移動 residential mobility との親和性が高く、国家・地域・都市の内部で移動している。その点から、上記の移民とは意味が異なっている。また今日、移民の国際的移動が都市の人口動態の変化に大きな影響を及ぼすようになっており、他方で、階級化された都市空間の再編成と再構成においては、ジェントリフィケーションが主要な過程の１つとなっている――しかしながら、この移民の国際的移動とジェントリフィケーションの２つが接合され、体系的に論じられることは稀である（ただし、ローカルスケールでの事例はいくつか散見することができる。Betancur, 2002; Murdie and Teixeira, 2011; Stabrowski, 2014を参照せよ）。Lees（2000）は、取り組むべき研究テーマの１つとして「移民」を挙げているが、実際のところはいくつかの事例研究で目立たないかたちでとり上げられているに過ぎず、多くの先行研究で引用されている概説書『ジェントリフィケーション *Gentrification* 』（Lees et al, 2008）では「移民」に焦点が当てられていない。このように「移民」が軽視されている一方で、意味的に近い部分がある「人種」という概念は、「移民」のような軽視された扱いを受けていない。その点を示す例として、ある定義で「人種」は「生死をも左右するような本質的な重要性を有する１つの社会構造」（Winders, 2009: 53）として定義されている。Freeman（2006: 3）が「アメリカの中でも黒人が多く暮らしているインナーシティは、ジェントリフィケーションの考察に際して独自の視点を必要とする特異で他に類を見ない空間となっている」（Lees, 2016も参照せよ）と指摘している。この指摘からもわかるとおり、「人種」と階級構造が投影されたジェントリフィケーションとの交錯は特にアメリカにおいて顕著に現れている。また、アメリカで見られる「人種」とジェントリフィケーションの関係については既に多くの研究で論じられており、そうした先行研究で明らかにされているように、ロサンゼルスのベニス Venice（Deener, 2012）、ワシントンD.C.のキャピトルヒル Capitol Hill（Hopkinson, 2012）、ニューヨークのハーレム Harlem（Freeman, 2006）、ニューオーリンズのバイウォーター Bywater（Peck, 2006）など、投資から見放されていたアフリカ系アメリカ人居住区では、白人ジェントリファイヤー（や高級職に就く黒人ジェントリファイヤー）の転入によって低所得者層の立ち退きが引き起こされている。

このように、アメリカのいくつかの都市において、それまで郊外へと向かっていた白人の移動がジェントリフィケーションの進行に伴って都心部へと向かうようになったことで、ジェントリフィケーションと移民の関係性に大きな関心が集まるようになっている。そもそもジェントリフィケーションと移民の関係性が体系的に論じられてこなかった理由の１つは、移民集住地区は高所得者から忌み嫌われるためジェントリフィケーションが発現する可能性が低く、逆にジェントリフィケーションが進行している地域には移民は寄りつかない、というように、都市空間においてはジェントリフィケーションの進行と移民の集住がうまい具合に反発し合うものだと想定されてきたためである（Ley 2010; Vicino et al, 2011;

＊　A Senior Lecturer in the School of Geography and Planning at Cardiff University, UK.
＊＊　日本学術振興会特別研究員、大阪市立大学文学研究科・院生
＊＊＊　大阪市立大学文学研究科・院生

Walks and Maaranen, 2008)。他方、このこと以上に経験的に認知されてきた複雑性があるということも確かであり、ジェントリフィケーションと移民の関係性は認識上の問題としても、そして地理的な問題としても検討されなければならない。さらに言うと、虐げられている住民は「黒人」、新参のジェントリファイヤーは「白人」という定型化された認識により、「人種」概念自体も説得力を持つようになっている。一方で、移民とジェントリファイヤーの関係性には非常に多くの側面がある――ジェントリファイヤーと移民はどのように接触し、反発し、共存するのか、そして両者はどのようにして１つにまとまり、もしくは分裂するのか、ということが問われることになる。

以上の点を踏まえ、本章では世界各国の事例を参照し、移民とジェントリフィケーションの関係性に関する以下の５つの分類を提示する――（１）ジェントリフィケーションの防波堤としての移民、（２）ジェントリフィケーションと隣り合わせで暮らしている移民（これは本質的にはバブルモデル bubble model に該当する）、（３）ジェントリフィケーションが進行する中で立ち退きにあっている移民、（４）ジェントリファイされた地域を避ける移民、（５）自らもジェントリファイヤーとなっている移民集住地区の移民。以上の分類に際しては、移民とジェントリファイヤーが社会的・経済的立場の点で平等ではないというClerval（2013）の主張を参考にしている。彼女によると、権力を行使できる階級と人種に属しているということから、ジェントリファイヤーは二重の意味で支配的な立場を占めている。また、移民にはホスト社会の環境や長年受け継がれてきた文化への同化が求められるが、ジェントリファイヤーはそうしたものには関与せず、むしろ、その支配的な立場を活かして地域に対して影響力を持つようになり、地域において象徴的な存在となる。他方、多くの移民はホスト社会において問題視され、従属的な立場に縛り付けられている。しかし、人種差別を受け、明らかに従属的な立場にあるものの、地域の文化や遺産を共有していることから「エスニック」な側面が強調されている移民集団も存在し、そうした移民集団は必ずしも「ネイティブ」やジェントリファイヤーといった非移民集団よりも低い人種区分の地位にあるわけではない（Winders, 2009）。そして、こうした状況は、移民たちの中にも自分たちが暮らす移民集住地区をジェントリファイしようとしている人がいるのではないか、という疑問を想起させる。その点を踏まえて、移民とジェントリフィケーションの関係性に関する分類には、移民でありながらジェントリファイヤーでもある集団を５つ目のカテゴリーとして含めている。そして、その５つ目のカテゴリーについては、これまでほとんど検討対象とされてこなかった。そこで本章ではコリアタウン（ロサンゼルス）を事例として、５つ目のカテゴリーに該当する状況について説明する。具体的には、一次資料と二次資料を用いながら、ロサンゼルスのダウンタウン西部に位置する「ハブとなった地域 hub neighbourhood 」（最初の定着地であるとともに、移民コミュニティの文化的な中心地として考えられている）において韓国系移民一世・二世によって進められてきたジェントリフィケーションのダイナミクスについて検討する。

本章では、移民とジェントリフィケーションの関係性に焦点を当てるが、分析フレームワーク自体は過去30年間に政治経済学で培われてきた今日でも有効性の高い知見を土台としており、さらに、理論的・実証的アプローチの前進に寄与している近年のジェントリフィケーション研究からも多くの着想を得ている。なお、ジェントリフィケーションに関して、とりわけその原因だけではなくジェントリフィケーションによってもたらされる結果に関しては、西側諸国の都市という限られた範囲の中で検討が進められてきた。そのため、そうした限定的な（かつ分極化した）議論によって様々な分析上の問題が生じていた（Slater, 2006; Davidson, 2007; Lees et al, 2008; Wyly, 2015の指摘を参照せよ）。そうした状況を受けて、近年では、ジェントリフィケーションをよりコスモポリタンで比較検討を指向するような研究スタンスと結びつけようとする動きが見られるようになっている。つまり、ジェントリフィケーション研究をよりスケールの大きい議論や手法（プラネタリーアーバニゼーション planetary urbanization や比較分析など）と効果的に接合し、従来の偏狭な視角を解体しようする試みが進められている（Wyly, 2015; Lees et al, 2015, 2016; Shin et al, 2016）。こうした動向を踏まえると、「グローバリゼーション・国際的移住・地域変容の分析の結び付きを一層強めるような重要な議論が、ジェントリフィケーションを介して生み出されている」というAtkinson and Bridge（2005: 15）の指摘にも大きな説得力を感じる。グローバルなスケールに目を向けるこのようなスタンス（Davidson, 2007も参照せよ）は、プラネタリージェントリフィケーション planetary gentrification の考え方ともリンクしている。グローバルノースとグローバルサウスの双方で見られる階級的分極

化・再投資・立ち退きといった「グローバルな秩序 global regularities 」（Lees et al, 2015: 6）に関わる現象が、プラネタリージェントリフィケーションの特徴を成している。そして、このプラネタリージェントリフィケーションは、都市の不平等の全体像を理解する上で非常に重要な考え方となっている。それは言葉を換えると、「都市で生じているジェントリフィケーション」を理解するのと同じように、「プラネタリーアーバニゼーションの一端を成すジェントリフィケーション」についても理解を深めよ、ということを示唆している（Wyly, 2015: 2515）。そして、グローバル、コスモポリタン、比較分析をキーワードとしてジェントリフィケーションにアプローチすることで、ジェントリフィケーションと世界各地に拡散しているエージェント― 移民 ―の関係性についてより踏み込んだ検討が可能になる。ジェントリフィケーションを、国際主義者によって流布され、世界各地のグローバルシティに定着している政策や戦略として捉える見方もある。しかし、上記のようなアプローチによって、ジェントリフィケーションに対するそうした短絡的な見方の克服が可能となり（Davidson, 2007）、さらに言うと、「ありふれた対象 usual suspect 」（ロンドン、ニューヨーク、サンフランシスコ、シドニーなど）の検討を克服するような、ローカルなスケールに限定されない検討や「他なる場所」の検討も可能となる。

2．移民とジェントリフィケーションの関係性の類型

都市研究に関する考え方が急速に変化している今の時代において（DeVertuil, 2016）、移民とジェントリフィケーションの特異な関係性を理解するアプローチとして類型化を採用することは、些か時代錯誤のように思えるかもしれない。しかし、ジェントリフィケーションの進行において移民の居住パターンが重要なポイントとなっていることを踏まえると、ここで提示する類型は、都市の現代的変容に関わる大きな２つの事象の緊張関係を理解する上で大きな助けとなるだろう。また、この類型は、「ジェントリフィケーションの地理学 geography of gentrification 」（Lees, 2000）を構成する上でも多くの点で役に立つ。ここで言う「ジェントリフィケーションの地理学」とは、トップレベルのグローバルシティのみならず、ジェントリフィケーションの進行と移民流入の萌芽が見え始めた幾分ダイナミックでない場所にも焦点を当てる分析視角である（Hwang, 2015）。

Snow and Anderson（1993: 36）は、類型を「経験的に把握された領域の構成員が共通点や相違点に基づいて分類・整理されるプロセス」として定義しており、「そうした類型によって、観察者の関心は研究対象としている現象の特定の側面に向かうことになる」と指摘している。本章では、大都市圏という巨大なコンテクストに取り込まれている地域スケールを対象とする。そして、その地域スケールで確認することができるジェントリフィケーションと移民の関係性に関して、その実態把握の助けとなる重要な論点、すなわち、ジェントリフィケーションと移民は空間においてどのように交錯しているのか、交錯している空間にはどのような特徴があるのか、ジェントリフィケーションと移民の空間的な交錯はどのような都市的ダイナミズムの中で生じているのか、大都市圏スケールではジェントリフィケーションをどのように捉えることができるのか、といった論点について検討する。以上のように本章では、地域スケールにおけるジェントリフィケーションと移民の空間的な交錯状態に焦点を当てるが、ジェントリフィケーションと移民の空間的な交錯状態というのは、ジェントリフィケーションのパターンや移民の移動パターン（様々な政策も含む）の時期や規模、建造環境に関わる力学やこれまで受け継がれてきた建造環境、そして、投資／再投資のベクトルが都心や郊外へと向かうことで生じる大都市の構造的変容など、大都市圏スケールで生じている様々な動向と切り離すことができない（実際に大都市圏スケールでの動向と密接な関係にある）。

本章で筆者が提示する類型は、（１）ジェントリフィケーションと移民に関して特定地域に特化しつつも世界各地で応用可能な視角（Krijnen and Beukelaer, 2015）、（２）様々な都市文化や都市システムの下で進行している多種多様なジェントリフィケーションを取り扱っている比較都市論的アプローチ（Ley and Teo, 2014）、この２つの分析視角とも重なる部分がある。表１に示した例は、すべてとは言わずともそのほとんどがグローバルノースの事例となっているが、これはある意味で必然的な帰結と言えるだろう。というのも、表中の都市ではジェントリフィケーションと国際的移民の交錯状態の把握が容易で、その分注目が集まっているためである（Ley, 2010）。しかし、実際のところ、移民の大部分はグローバルサウスから流入しており、さらに言うと、例えばドバイ、ヨハネスブルク、シンガポール

表１．移民とジェントリフィケーションの関係性の類型

関係性	大都市圏スケールでの動向		地域スケールでの空間的交錯	事例地域
	都市内部のダイナミクス	ジェントリフィケーションの進行度や影響力		
カテゴリー１ ジェントリフィケーションの防波堤としての移民	・移民の集住	・弱い影響力	・交錯せず	・グットドール（パリ） ・オンセ（ブエノスアイレス） ・ヒルブロウ（ヨハネスブルク） ・リトルインディア（シンガポール）
カテゴリー２ ジェントリフィケーションと隣り合わせで暮らしている移民	・ジェントリフィケーションが進行 ・強力な求心力	・進行中	・ジェントリファイヤーと移民は地理的に近接して暮らしているが相互に無干渉（Butler, 2003）	・ストークニューイントン（ロンドン） ・パリ 10 区
カテゴリー３ ジェントリフィケーションが進行する中で立ち退きにあっている移民	・ジェントリフィケーションが進行 ・強力な求心力	・進行中	・交錯状態の縮小	・チャイナタウン（ニューヨーク） ・カスコビエホ（パナマシティ）
カテゴリー４ ジェントリファイされた地域を避ける移民	・ジェントリフィケーションが完了 ・強力な求心力	・強い影響力 ・成熟	・交錯せず	・トロント郊外 ・マンハッタンに限定されない広域のニューヨーク ・シドニー郊外 ・バンクーバー郊外
カテゴリー５ ジェントリファイヤーとしての移民	・移民の集住 ・中心性の分散もしくは求心力の低下	・弱い影響力	・交錯状態の崩壊	・リトルハバナ（マイアミ） ・コリアンタウン（ロサンゼルス）

といったグローバルサウスの都市には、単にグローバルノースに移民を送り出しているだけではなく、グローバルサウスの移民を呼び寄せているという側面もある。つまり、そうしたグローバルサウスの都市というのは、本来的には２つの顔を持っている（Benton-Short et al, 2005も参照せよ）。

本章で提示しているジェントリフィケーションと移民の関係性に関する５つの分類は、時間軸と空間的広がりの両方について考慮しているジェントリフィケーションの段階モデルをベースとしている。Clay（1979）が提示している初期のモデルでは、パイオニア型のジェントリフィケーションから定住者型のジェントリフィケーションへと変化していく、という具合に、「一定の秩序のもとで規則的に進行する」過程としてジェントリフィケーションが捉えられている（Lees et al, 2008: 34）。一方で、近年提示されているモデルでは、必ずしも規則性の解明が指向されているわけではない。むしろ、ジェントリフィケーションがその進行速度を緩めたり、ジェントリフィケーションとは正反対の過程が進行したりするなど、無数の様々な状況がジェントリフィケーションのモデルに反映されている。さらに、政府によって主導されているジェントリフィケーションの性質を強調する傾向も見られるようになっている（Lees et al, 2016）。ここで注意すべきなのは、カテゴリー２～４で示しているそれぞれの状況が、ジェントリフィケーションと移民の交錯状態が変化していく過程の一部だということである。その変化の過程としては、ジェントリフィケーションが移民の居住地にまで波及する、そして一定の期間を経た後、移民のほとんどがインナーシティから追い出される、さらに移民がジェントリファイされたインナーシティを避け別の場所に移動するという一連の流れを想定している。しかし、地域スケールで進行しているジェントリフィケーションは、こうした過程のいずれかの段階で速度を緩める可能性があるため、上記の一連の流れが成立しない場合も考えられる。他方、カテゴリー１とカテゴリー５は例外的なカテゴリーだと言えるだろう。カテゴリー１は、インナーシティにおける移民の集住がジェントリフィケーションの進行の防波堤となっている状況を指している。そして、カテゴリー５では移民をジェントリファイヤーとして捉えており、このカテゴリー５の状況においては移民自身が自分たちの居住地域のアップグレードを試みている。ただし、カテゴリー５は、海外投資家によるアップグレードと混同してはならない。というもの、例えばロンドンのロシア人のように、海外投資家の多くは富裕地区において投資を行っており、彼ら彼女らを移民集住地区に暮らす移民と同列には扱えないためである。

2.1. カテゴリー1：ジェントリフィケーションの防波堤としての移民

カテゴリー1の状況では、移民がジェントリフィケーションの進行に対する強固な防波堤となっている。この「ジェントリフィケーションが抑止されている thwarted gentrification」状況について検討するにあたり、まずはパリの郊外部にほど近いグットドール Goutte d'Or（Pattaroni et al, 2012; Clerval, 2013）のような、パリの中でも移民が多く暮らしている地域についてとり上げたい。Clerval（2013）が指摘しているように、社会住宅の集中と（アフリカ系・北アフリカ系を中心とした）移民集団の存在によって、パリの東部地区はジェントリフィケーションに対する防波堤として機能している。パリの北部と東部にかけては社会住宅から成るより規模の大きい移民集住地区が広がっているが、信用度が低い時代錯誤な建造環境と、同じく信用度が低いと考えられている住民の両方が見られる東部地区は、そうした郊外の移民集住地区の先端部に位置している。彼女によると、かつてパリ東部ではフランス人の大衆労働者階級 une classe ouvrière et populaire が大勢暮らす一大居住区が形成されていた。そして、その居住区はオスマンによる19世紀の暴力的排除を耐え抜いたが、戦後のフランスにおける大規模な空間改造には打ち勝つことができず、その後はパリの新しい労働者階級である移民の居住区となった。こうした地域では、移民が大勢を占めている状況が公共空間において象徴的に表れており、また、社会住宅の密集や地主の不在といった物理的環境にもそうした移民の集住が投影されている。そして、こうした状況によって、この地域ではジェントリフィケーションの進行に歯止めがかかっている。Pattaroni et al（2012: 1236）は、パリの移民集住地区に関する上記の指摘に同意した上で、「左翼的なリベラルのジェントリファイヤーさえも――彼ら彼女らは満足のいく生活様式を確立させることができない――グットドールを去っている」と述べている。これは、ジェントリフィケーションの防波堤に関する研究で検討されてきた劣悪な建造環境、アメニティの欠如、公共の場での逸脱行動、国家に扇動された抵抗運動の政治学などとも関連している（Ley and Dobson, 2008; DeVerteuil, 2012）。また同様の状況が、ロサンゼルスのダウンタウンのすぐ西側にあるピコユニオン Pico-Union でも確認されている。ピコユニオンではメキシコや中米から流入してきたワーキングプアの移民の居住区が、フットワークの軽いパイオニアのジェントリファイヤーをも跳ね返す強固な壁として立ちはだかっている（この点に関してはDeVerteuil 2011, 2015を参照せよ。またトロントに関してはWalks and August, 2008を参照せよ。居住権の保障と強い紐帯が土台となり地域に安定的に定着している移民コミュニティが、いかにしてジェントリフィケーションの進行を食い止めているのかという点について論じられている）。

他方、グローバルサウスにおいてもジェントリフィケーションの発現を抑止している移民居住地域を確認することができる。筆者が着目したヨハネスブルクでは、ヒルブラウ Hillbrow のような中心業務地区に近接し、かつて白人だけが暮らしていた地域において、アフリカ系の移民の大規模な流入と再定住に伴って投資の引き揚げが進行していた。しかし、ヨハネスブルグの中心部ではほとんどジェントリフィケーションが進行していなかったため、ヒルブラウのような地域も手つかずのままジェントリフィケーションが発現することもなかった（Rogerson and Rogerson, 2014）。さらにブエノスアイレスでも同様の状況が確認されている。ブエノスアイレスの中心業務地区の南部（サンテルモ San Telmo やボカ Boca ）ではジェントリフィケーションが進行してきたが、移民（パラグアイ系やボリビア系など）が数多く暮らす地域の西側、例えばオンセ Once のような地域ではアップグレードがほとんど生じていない（Herzer et al, 2015）。そして、エスニック集団の高密度な集中と高度な連帯が見られるシンガポールのリトルインディア Little India においても、ジェントリフィケーションはほとんど発現していない（Chang, 2016）。

2.2. カテゴリー2：ジェントリフィケーションと隣り合わせで暮らしている移民――バブルモデル

ここで言うバブルモデルとは、May（1996）がロンドン北東部のストークニューイントン Stoke Newington を事例として提示したもので、彼はジェントリファイヤーの日常生活には明確な境界線があり、居住地域が移民に取り囲まれていたとしても、ジェントリファイヤーはそうした移民と接することはほとんどないということを明らかにした。こうした状況下での社会生活は「テクトニック tectonic 」（Butler, 2003）な状態、すなわち、ジェントリファイヤーと移民は空間的には近接しているものの、社会的には分離した状態となっている。またButler（2003: 2469）

は、ロンドンのイズリントン Islington のジェントリフィケーションに関する研究において、新たに転入してきたジェントリファイヤーは多様性に関心を持ち、移民集住地区での新生活を指向していたにもかかわらず、一方では「地域における社会資本の醸成に投資する意欲はなく、彼ら彼女らの関係性は総じて『自分たちのような人びと』との関係に限定されている」ことを明らかにしている。そして実際に、実質的な交流はごくわずかであり、社会制度において、とりわけ教育環境においてはジェントリファイヤーと移民の間に大きな溝が出来ている（Clerval, 2013; Butler, 2003; Freeman, 2006を参照せよ）。

またClerval（2013）も、パリの移民が混在している地区において同様のテクトニックな関係性を把握しており、そうした地域でもジェントリファイヤーはソーシャルミックスに満足しつつ、一方では、自分たちの子どもを地元の学校に通わせないようにしていた（Clerval and Fleury, 2009も参照せよ）。パリにジェントリフィケーションの波が押し寄せたのは比較的遅く、特に10区のような東部の地区では、ジェントリファイヤーと既に長期にわたって定着をしている移民コミュニティが同じ地域で暮らすという状況が見受けられる。そのため、そうした状況を踏まえると、上記のようなジェントリファイヤーと移民の関係性は特段驚くようなことでもない。またマドリード中心部では、非ヨーロッパ系移民が大きな存在感を示しているものの、同じく強い影響力を持っているジェントリファイヤーほどのボリュームには達していない。そして、非ヨーロッパ系移民とジェントリファイヤーは同じ「エキゾチック」な空間で一定期間共存しながらも、それぞれの生活世界は社会的に隔絶されている（Sequera and Janoschka, 2015）。そして大西洋の向こう側、サンフランシスコのミッションディストリクト Mission District では、長年地域で暮らしてきたラテンアメリカ系移民と新参の白人ジェントリファイヤーとの間で、良好でありながら一方では不安定な共存関係が構築されていた（Lees et al, 2008）。Castells（1983）は、サンフランシスコ市において移民をベースとしたローカルスケールの政治の実現が要求された際に、事例地域としてミッションディストリクトをとり上げている。当時の政治的なバランスはラテンアメリカ系住民にとって極めて有利なものであった。しかし、その後、ドットコムバブル the dot.com boom によってジェントリフィケーションの進行に拍車がかかったことで、2000年頃までには政治的なバランスが反転し、2010年代に至ってもそうした状況は加速している（Pogash, 2015）。グローバルサウスに目を向けた場合には、イスタンブールの事例が多くの示唆を与えてくれる。かつてイスタンブールでは、都市に相応しくない人びとが国家によって移民地区に押し込められ、移民地区はスティグマ化されていた。しかし、そうした移民地区では人為的に家賃格差が生み出され、その結果として現在では、多くの人びとが利潤、「粋 edginess 」、「創造性 creativity 」の名の下で移民地区を活用するようになっている（Sakizlioglu and Uitermark, 2014）。

２．３．カテゴリー３：ジェントリフィケーションが進行する中で立ち退きにあっている移民

このカテゴリーは、ジェントリファイヤーの流入に伴って移民が立ち退きにあっている状況を指しており、パイオニアのジェントリファイヤーによって主導される「バブル bubble 」モデルが強い関連性を持っている。そして、ここで言う立ち退きには、物理的な立ち退きに加えて、移民の文化や消費活動を後退させる象徴的な立ち退きも含まれる。このジェントリフィケーションによる立ち退きはパリでも報告されており（Clerval, 2013）、またパリだけではなく、ニューヨークにおいても確認されている。しかし、Vicino et al（2011: 399）は、ニューヨークのマンハッタンには移民集住地区がほとんど存在していないと指摘している――唯一、ワシントンハイツ Washington Heights とチャイナタウンだけが、2000年代に入ってからも都市に残る移民集住地区として捉えられていた。同様に、サンフランシスコではミッションディストリクトとチャイナタウンといった限られた地区に移民が集中しており、両地区ではいま現在でも移民が立ち退きの圧力にさらされている。なお、Vicino et al（2011）は、大都市圏全体の外国出身者の人口比率から算出した立地指数が1.25以上となっている国勢調査地域を移民地区として定義している。

このカテゴリー３が示しているのは、次のような考え方である。すなわち、移民のハブに対する評価においては、人種がネガティブなものとして評価されているわけではなく、エキゾチックで「エスニック」な空間として捉えられており、その点が別の地域で暮らしている富裕層にとって魅力的な要素となっている。それゆえに、ジェントリフィケーションの進行に拍車がかかっている、という考え方である。この点に関しては、北アメリカのインナーシ

ティに位置するチャイナタウンが示唆に富んだ事例となっている。チャイナタウンはセグリゲーションとゲットー化を通じて形成され、孤立したコミュニティとして長きにわたって疎外されてきた。そして、近年は立ち退きの対象となっており、エキゾチックな民族的構成がジェントリフィケーションの要因の１つとなっている。ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアでは、ジェントリフィケーションの進行が見られるチャイナタウンの人口のうち中国人が占めている割合は50%以下であり、その割合は1990年以降低下し続けている――こうした動向は、白人の増加に伴ってジェントリフィケーションによる立ち退きが増加している証拠として捉えることも可能であるが、近年では多くの中国系移民が郊外のチャイナタウンへと直接向かうようになっている――以上の点に関する問題点については、次のカテゴリーの説明の際にとり上げる（Li et al, 2013）。またシカゴやサンフランシスコにおいても、ラテンアメリカ系住民が多く暮らす一部の地域で同様の状況が確認されている（Lees et al, 2008）。Betancur（2002）は、シカゴのラテンアメリカ系移民が暮らす地域を対象として、（新たに転入してきた白人による）ジェントリフィケーションが進行する中で、ラテンアメリカ系移民のコミュニティが衰退していく状況について検討している。トロントのリトルポルトガル Little Portugal でもジェントリフィケーションの進行に関して同様の状況が確認されており、この地域でのジェントリフィケーションはコミュニティの強固な紐帯によって抑止されていたが、近年ではそうした紐帯が弱体化しつつある（Murdie and Teixeira, 2011）。さらにブルックリンのグリーンポイント Greenpoint でも同様の状況が発生しており、近年ポーランド系移民が増加している地域には、「家庭の居住空間・コミュニティ・ジェントリファイされている地域の継続的かつ長期的な変革」の波が徐々に押し寄せつつある（Stabrowsky, 2014: 796）。

グローバルサウスの事例としては、地域の活性化が進められているパナマシティのカスコビエホ Casco Viejo を挙げることができる（Sigler and Wachsmuth, 2016）。カスコビエホでは、国際的に移動するジェントリファイヤー transnational gentrifier と地元のディベロッパーが手を結ぶことによって、長年地域に根付いていた移民コミュニティが地域から立ち退かされる状況が生じている。ベイルートのゾカクエルブラット Zokak el-Blat でも同様の状況が発生しており、数十年に及ぶ内戦や他国による占領を免れてきた難民が、新築のジェントリフィケーション new-build gentrification によって立ち退かされてきた（Krijnen and De Beukelaer, 2015）。このカテゴリーで取り上げてきたすべての地域において、最終的には非常に分かりやすいシンプルな状況が生じている――つまり、排他的な立ち退きによって、地域は完全にジェントリファイされたインナーシティへと姿を変えることになり、新たに流入してきた移民が（高額な家賃などによって）郊外地域へと直接的に追いやられている。ただし、他のありとあらゆる大都市圏において同様の状況が生じているわけではない――例えばモントリオールやブリュッセルでは、ジェントリフィケーションが停滞することによって、移民がしばらくの間中心地域で暮らし続けることが可能になったという事例も報告されている（Van Criekingen and Decroly, 2003）。

２．４．カテゴリー４：ジェントリファイされた地域を避ける移民

このカテゴリーに分類される状況では、ジェントフィケーションの進行や強制的に（もしくは不可抗力的なかたちで）郊外居住を好むように仕向ける力学によって、移民たちはジェントリファイされたインナーシティを回避するようになっている。このカテゴリーの検討に際しては、バンクーバーの事例が多くの点で参考となる（Ley, 2010）。バンクーバーの中国系移民は、ジェントリフィケーションが進行しているインナーバンクーバー inner Vancouver だけでなく、インナーシティのチャイナタウンも避け（ただし、新築の高層マンションや富裕層の地区は除く）、郊外の移民集住地区で暮らすようになっている――Li（1998）は、ロサンゼルスの状況を踏まえた上で、このような郊外の移民集住地区を「エスノバーブ ethnoburb 」と表現している（Reckard and Khouri , 2014も参照せよ）。Ley（2010: 15）はこの点に関して次のように主張している。

> 新規居住者と既存住民が暮らすインナーシティ地区についての従来の捉え方は…新たな方向へと向かいつつある。今日、多くの移民は航空機を利用して都市に出入りしており、彼ら彼女らの中には空港に近接した郊外地域での居住を望む者がいる。とは言え、郊外には他の強みもある。他国・他都市へのアクセスが至便なゲートウェイ都市 gateway city のダウンタウンやインナーシティ地区には、民間企業や公共団体の仕事に従事するグローバル

ワーカーが多く、彼ら彼女らを当て込んだ労働市場や住宅市場が活況を呈している。そのため貧困状態にある移民の多くが、郊外の安価な住宅、新しく立地した産業や倉庫、単純サービス業へと追いやられるようになったものの、それによって生活費や家賃が高騰するポスト工業時代を象徴するような中心地域から郊外へと再移住する流れが生まれている。

バンクーバーにおけるこのような移住の流れと言うのは、具体的には裕福な中国系移民が郊外のリッチモンド Richmond へ直接向かうということを指している（Ley, 2010）。それは裏を返せば、裕福な中国系移民が、移民居住区の名残であるやや古びた人口密集地域のチャイナタウンを避けていることを意味している。重ねてLey（2010: 148）は、「戸建住宅が卓越している地域への選好が高まったことで、バンクーバーの中でも集合住宅が密集するダウンタウンとインナーシティでは住宅需要が低下した。そして、そうした集合住宅物件が密集している地域では、ジェントリフィケーションの進行に付随して新規の中国系住民の存在感が極めて小さくなっていった...」と指摘している。また、ロサンゼルスでも移民が郊外へ向かっていく動きが確認されており、ロサンゼルスへと流入してくる中国人の投資や中国系移民の大部分は、直接サンガブリエルバレー San Gabriel Valley へと向かっている――1992年にまで遡っても、ロサンゼルスに拠点を置いている中国系企業の55%がサンガブリエルバレーに分布し、一方でインナーシティの伝統的なチャイナタウンに拠点を置いていた企業はわずか6%に過ぎなかった（Light, 2002: 221）。

このように移民が都心部を避け郊外へと向かっていくパターンは、シドニー（Forrest and Dunn, 2007）やトロント（Harris, 2014）でも確認されている。Walks and Maaranen（2008）は、カナダで最も人口が多い大都市圏（モントリオール、トロント、バンクーバー）の1971年から2001 年までのデータを用いて、ジェントリフィケーションの拡大によって民族的多様性の後退や移民の離散化が生じたことを明らかにしている。近年のトロントでは、新たに流入してきた移民の大多数が直接郊外へと向かっており、中でも特に1950年代から1960年代にかけて形成されたインナーリングに向かう傾向があり、そうした移民が流入してきた地域は大都市圏の貧困集中地帯を構成するようになっている（Harris, 2014）。他方、ワシントンD.C.では、実質的にすべての移民がインナーシティでの居住を避けている。古くからあるアフリカ系アメリカ人コミュニティが依然として残ってはいるものの、ワシントンD.C.のインナーシティは、白人の流入に伴ってジェントリフィケーションの中心地となっており、2000年時点では全区画の67％がジェントリファイされたと見積もられている（Vicino et al, 2011）。

2．5．カテゴリー5：ジェントリファイヤーとしての移民

ここで問わなければならないのは、移民が自らジェントリファイヤーとなり、郊外ではなくインナーシティ地区に再投資し始めた場合には一体どのようなことが起きるのか、ということである。典型的な事例として考えられるのは、移民が初めて流入した場所でもある既存の移民集住地区に、移民ジェントリファイヤー immigrant-gentrifier が流入していくケースである。それはつまり、アメリカのチャイナタウンで見られるような、周囲から孤立しているインナーシティの移民集住地区が、地域外のアクターによってジェントリファイされるのではなく、新しく転入してきた（もしくは一度転出した後に舞い戻ってきた）同民族のアクターによってアップグレードされる状況を指している。そして、そうした状況の延長では、移民集住地区におけるエスニック経済の土台の形成であるとか（Lin, 1998; Light, 2002）、州政府に様々な要求を行うエスニック集団の政治基盤の形成といった（Castells, 1983）「移民社会の成立を促す仕組み immigrant growth machine」が阻まれ、再投資・立ち退き・階級的分極化といった本格的なジェントリフィケーションのプロセスが進行していく。

この最後の５つ目のカテゴリーに関して特に興味深いのは、そうした移民のジェントリファイヤー化が特定の性格を有する都市において、すなわち、求心力が弱く、多くの移民が集中しており、（生活環境の良さが要因となっているジェントリフィケーションではなく）人口流出によるジェントリフィケーションの歴史が比較的浅い都市において生じているという点である。ロサンゼルスやマイアミといったアメリカの中でもサンベルト地帯に位置している都市において、このカテゴリーの事例を確認することができる。20世紀を通じて大きな成長を遂げたこれらの都市では、先進的な中心分散主義と長期的な郊外投資によって都市の求心力が弱く保たれ、

それによってジェントリフィケーションの圧力も全体的に小さくなっている。そして、少なくとも今日に至るまでは、これらの都市においては、中心業務地区との近接性ではなく、自然環境（とりわけ沿岸部）との近接性が居住地選好において重要視されている。以上の点から、マイアミやロサンゼルスのような都市は、ジェントリフィケーションの性格が都市中心部への人口集中・強力な中心性・非移民人口の優位性の３点によって特徴づけられるニューヨークやロンドンといった都市と対をなしていることがわかる。Clerval（2013）は、「ジェントリファイヤーと非ジェントリファイヤーは、階級だけではなく、人種やエスニシティの点でも異なっている」と指摘しているが、この５つ目の新しいカテゴリーに分類される状況は、彼女の指摘と真っ向から対峙している。マイアミのリトルハバナ Little Havana やロサンゼルスのコリアタウンは、主流社会の資源ではなく、移民の投資によって形成された比較的珍しい移民集住地区である（Keil, 1998; Light, 2002）。これらの地域においては、ローカルな特定の場所で発現するというジェントリフィケーションの性質と、コスモポリタンで各地へ移動していくという移民の性質の両方が顕著に現れ出ている。

移民集住地区において移民自らがジェントリファイヤーとなる状況は、世代や地域を超えて生じている（Feldman and Jolivet, 2014参照）。そして、そうした移民自らがジェントリファイヤーとなる状況によって、ブルックリンの「ロシア化 Russification 」（Brown and Wyly, 2000）したブライトンビーチ Brighton Beach や、同じくブルックリンの「ポーランド化 Polonization 」（Stabrowski, 2014）したグリーンポイント Greenpoint のように、迫害を受けながらも比較的安定してきたエスニック地区の状況が大きく改変され、ジェントリフィケーションの発現の土壌が生成されていく可能性がある。また、例えばリトルハバナでは、キューバからの直接的な海外投資によってではなく、1950年代から1960年代にかけてマイアミにやって来たキューバ系移民とその次世代が地域に戻ってきたことによってジェントリフィケーションが進行するようになった。こうした状況が示しているように、リトルハバナでは新規の投資が実施されているが、それは白人の流入とはほとんど関係がない（Feldman and Jolivet, 2014）。マイアミと同様に、ロサンゼルスのジェントリフィケーションも中心性を欠いた都市構造によって特徴づけられ、オルタナティブな多中心的なモデルであると同時に英米のものとは異なるモデルとなっている（DeVerteuil, 2011, 2012, 2015）。つまり、ロサンゼルスのジェントリフィケーションは一般的なジェントリフィケーションのモデルとは一致しない部分が多い。そのため、ロサンゼルスの中でも典型的な移民集住地区のジェントリフィケーションが見られるコリアタウンを対象とすることによって、他都市の事例との比較はさておき、「ありふれた対象」のリストを再生産することは回避することができる。

３．コリアタウンのケーススタディ

コリアタウンはロサンゼルスのダウンタウンの西側に位置するインナーシティで、人口密度の高い地域となっている。この地域の人口は15万人を超えており、ラテンアメリカ系住民がマジョリティとなっているものの、韓国系住民も人口の約３分の１を占めている（US Census, 2010）。こうした人口構成を考えると、コリアタウンを「典型的な多国籍空間 emblematic transnational space 」（Lin, 1998: 313）として捉えることも可能である。しかし、コリアタウンにおけるジェントリフィケーションは明らかに局所的なものであり、ジェントリファイヤー、住宅投資家、商業投資家などを含む第一世代の移民がジェントリフィケーションの進行に関係している。韓国系住民がコリアタウンのマジョリティとなったことはないが、その総数自体は徐々に増加している――1990年には韓国系住民は31,700人であったが、2010年には41,426人にまで増加している。また、コリアタウンでは、住宅空間におけるジェントリフィケーションよりも先に消費空間におけるジェントリフィケーションが進行してきた（Keil, 1998）。しかし、コリアタウンを東西に横断し、ロサンゼルスの中でも裕福なウエストサイドへと向かうウィルシャー通 Wilshire Boulevard 沿いでは新築物件の建設が進んでおり、そうした近年の動向をグレードアップ・立ち退き・社会的分極化の予兆として捉えることも可能である。

筆者は2013年と2014年に、韓国語話者のリサーチアシスタント２名の協力を得て、コリアタウンの新築のコンドミニアムで暮らす韓国系移民のジェントリファイヤー 25名にインタビューを実施し、さらに「キーインフォーマント」となるディベロッパー、建築家、コミュニティの広報担当者など10名にもインタビューを行った（De Verteuil et al 発刊予定）。そのインタビューでは、韓国とロサンゼルスでの居住地移動の経緯、現在の居住地域の状況、コリアタウ

ンに住んでいる理由、日常生活の中でコリアタウンの知人と交流する際に利用する空間、韓国への帰国の有無といった項目について質問を行った。なお、本調査におけるすべてのインフォーマントが自身を移民であり、かつジェントリファイヤーでもあると考えていたため、ジェントリフィケーションと移民がコリアタウンという空間を*介して through*、そして空間の*中で in* どのように相互に関係し合っているのかという点について深く検討することができた。また、この定性調査の補強を目的として、2003年から2013年の不動産データ（Data Quick, 2013）を確認したところ、コリアタウン全体の地価の中央値が25％上昇していたことが明らかとなった。この数値は、ロサンゼルス市全体の値（37％上昇）とロサンゼルス郡全体の値（18％上昇）の中間に位置する値となっている。なお、郵便番号90010に該当するウィルシャー通沿いの地区は除いているが、この一帯では55%も上昇している。こうした点を踏まえると、この郵便番号の地区が、ロサンゼルス市の中でも唯一韓国系住民がマジョリティとなっている地区であり、また唯一新築のジェントリフィケーションの進行が顕著に表れている地区であるということもさして驚くようなことではない。

35件のインタビューから、コリアタウンのジェントリフィケーションには、移民集住地区型のジェントリフィケーション immigrant enclave model of gentrification の特徴があることが明らかとなった。大きくは５つの特徴を見出すことができたが、そのうちの１つ目は、コリアタウンの移民集住地区型のジェントリフィケーションが1980年代以降に移民や企業家を惹きつけてきたということである。その点に関して、ある韓国系移民一世のジェントリファイヤーは次のように述べている。

> コリアタウンで暮らしている韓国人はコリアタウンへの再投資を進めています。ですので、コリアタウンではますますジェントリフィケーションが進んでいくでしょう … とは言え、コリアタウンは今もロサンゼルスの中心部に位置していますし、そもそもコリアタウンは韓国人の努力によって確立されてきました。

そして彼は次のように続けた。

> （コリアタウンは）韓国人にとって非常に居心地の良い場所です。英語について心配する必要もありませんからね。他の韓国人と知り合いになって、いろいろと話をすることができるので、孤独になることもありません。それにここでは韓国料理を食べるのにも苦労はいらないです。こうした環境の良さに背中を押されて、私はこのマンションを購入することにしました。

２つ目の特徴は、この移民集住地区型のジェントリフィケーションは、アジア型の新築のジェントリフィケーション new-build Asian model（Lees et al, 2016）と部分的には一致しているものの、韓国で行われているような強引な国家介入は見受けられないということである。ソウルは世界でも最も人口密度が高く、地価の高い都市の１つである。しかし、興味深いことに、ロサンゼルスに国際移住してきた韓国人は、英米型のジェントリフィケーションついてほとんど知識を持っていない。そのため彼ら彼女らは、ニューヨークやパリなどで生活しながら身をもってジェントリフィケーションを経験し、テルアビブ Tel Aviv でジェントリファイヤーとなっているユダヤ人（Gonen, 2015）やベイルートでジェントリファイヤーとなっているユダヤ系のレバノン人（Krijnen and De Beuikelaer, 2015）とは大きく性格が異なっている。むしろ、コリアタウンのジェントリフィケーションは、段階的なグレードアップというよりは、新築・高層・計画的都市再生を特徴とする韓国型のジェントリフィケーション Korean-style gentrification と一致する部分が多い。

> 韓国では過去30年間にわたって不動産開発が都市経済の拡大の柱となってきた。そのため、韓国のジェントリフィケーションは欧米都市のジェントリフィケーションとは幾分異なる経緯を辿ってきた。私の見方では、韓国における都市再生事業は都市におけるジェントリフィケーションの一形態として捉えることができる。というのも、そうした都市再生事業の背後では、高騰した家賃の支払いが困難であるとか、高額な新築住宅を購入する余裕が無いことを理由に、貧困層が都市部の居住区から出て行かざるを得ない状況が生じているためである。（Ha, 2015:165。Shin, 2008, 2009も参照せよ）

こうした点を踏まえると、韓国のジェントリフィケーションが高密度化を指向する公共政策と密接な関係にあることがわかる。一方で、コリアタウンにおける政府の役割は、韓国のそれと比べると非常に小さく、こうした状況は、ロサンゼルスで展開されている新自由主義的な都市政策の比較的無干渉な性

格を考えると至極当然とも言える。どちらかと言うと、コリアタウンは地元自治体から目を向けられておらず、1992年の暴動の最中やその直後においてさえも、暴動によって大きな被害が出ていたにもかかわらず、緑地の建設や効果的な取り締まりが遅々として進められなかった。また都市計画の担当者は、異なる視点でジェントリフィケーションを捉えている。

> 韓国ではジェントリフィケーションによる既存住民の立ち退きが可能かもしれないが、アメリカでは不可能です。アメリカ社会では、人びとは皆、互いに尊重し合っています。役所に行けば、過去50年分の都市計画の資料を閲覧することができます。アメリカの都市発展のテンポは、韓国よりも遅いんです。もちろん私も変化を肌で感じていますが、ジェントリフィケーションによる変化はどれもゆっくりとやって来ます。

また、地域再開発事業団（CRA）や首都圏交通局（MTA）も、ウィルシャー通沿いで高密度化事業を介した間接的なアップグレードを推し進め、そうした事業の多くがジェントリフィケーションの足がかりとなったことも確かである。しかし、最終的にジェントリフィケーションの原動力となったのは、1980年代にロサンゼルスに到着した韓国系移民一世の人びとであった。つまり、コリアタウンにおける新築のジェントリフィケーションは、ソウル側から投下される多国籍資本ではなく、主として韓国系アメリカ人らの資本によって下支えされているのである。

コリアタウンにおけるジェントリフィケーションの３つ目の特徴は、ジェントリフィケーションが緩やかな投資の引揚げや段階的な地代格差の広がりによって進行したわけではなく、突如として訪れた危機的な状況の中で進行したということである。この点に関連することとして、あるキーとなるインフォーマントは次のように述べている。

> **インフォーマント：**
> 多くの方が驚くことですが、この地域のコミュニティでは1992年の暴動の後も様々な問題が生じていました。今でもコミュニティに対してある種の誤解があるようですが、ラテンアメリカ系住民や黒人系住民の怒りの矛先が韓国人に向けられたんです。つまり私たちは被害者になったんです。でも、私たちには回復力があったので、立ち直ることができました。

> **インタビュアー：**
> この地域の変化について何か感じることはありますか？暴動から20年が経過していますが、特にここ10年の間に何か変化があれば、あなたの知っている範囲で教えてください。

> **インフォーマント：**
> はい、最初に変わったことと言えば、韓国人経営者ですかね。韓国人経営者たちは投資を再開しようとしていました。

> **インタビュアー：**
> 韓国人経営者というのはどういう方ですか？韓国にお住まいの方ですか、それともこの地域の方ですか？

> **インフォーマント：**
> いえいえ、韓国系アメリカ人の方です。彼ら彼女らは生活の糧を失ってしまったんですが、経営を立て直すために懸命に働いていました。そう、立て直さざるを得なかったんです。保険を利用した人もいたようですが、保険制度自体が停止状態でした。

４つ目の特徴は、1992年以降にコミュニティが再建されたこと、そして、移民一世たちが子どもの独立を機に2010年代初頭にコリアタウンへと戻ってきたことが、現在のジェントリフィケーションの大きなきっかけとなったということである。その点に関して、ある高齢のジェントリファイヤーは次のように語っている。

> コリアタウンには多くの韓国人が住んでいますが、新しく越してきた移民も多く暮らしています。韓国人の多くは、子どもがある程度成長するまではここで暮らしています。そして、子どもが大きくなったら、より良い教育環境を求めてコリアタウンから出て行き、子どもが独立するくらいの年齢になるとまたここへ戻ってきます。これが１つのパターンになっています。ここには多くのエスニック集団が集まっているので、韓国人はそうした環境が子どもの教育にとって良くないものだと考えています。そしてこんな話も耳にしたことがありますよ。多くの韓国人の親たちは、自分の子どもが素行や成績の悪い生徒たちと同じ環境で勉強することを心配し、コリアタウンの学校に子どもを通わせたくないみたいです。

また、別の高齢のジェントリファイヤーも同様のことを語っている。

> まずもって、韓国人がロサンゼルスを去って行ったのは、生活環境が悪く、危険だったからです。というのも、当時は黒人とヒスパニックが人口の半分を占めていましたからね。韓国人の割合は20%といったところです。ここで暮らしていた韓国人は、家賃が安い賃貸アパートに住んでいました。しかし彼ら彼女らは、今ではコリアタウンが住み心地の良い街になっていることを知っています。そして、ビジネス街が発展し街がきれいになったことで、ホームシックに陥っていた郊外で暮らす韓国人や古参の韓国人たちが、ここに引っ越してくるようになったんです。郊外の一戸建てに住んでいた年配の方が都会に引っ越してくることで、コリアタウンで住宅購入の需要が生まれるので、韓国人たちは高級マンションを建て始めました。つまり、年配の方の快適に暮らしたいという気持ちやコリアタウンの近くに住みたいという気持ちに応えるために、高級マンションが建設されているんです。

通常のジェントリフィケーションのモデルにおいては、ミドルクラスのアメリカ人が一度郊外へ出て行くとそのまま半永久的に郊外で暮らす状況が前提とされているが、韓国系移民の「住宅ループ residential loop」はそうした通常のジェントリフィケーションに斬新な要素が付け加えられている。またそうした状況というのは、現在進行形の（そして多国籍に展開されている）再投資を活用しているサンガブリエルバレーの中国人とは異なり、ロサンゼルスの郊外ではコリアタウンの数が相対的に不足していることを物語っている。最後の５つ目の特徴は、他のエスニック地区と同様にコリアタウンもクールな地域になっているということである。ただし、確かに危険な地区から粋で人気の高い地域へと変貌を遂げたが、白人のジェントリファイヤーにとってはまだ魅力的な存在にはなっていない。この点に関して、ある中年の移民は次のように述べている。

> でも、みんなと話していた内容や、自分の記憶を遡ると、コリアタウンは... 悪い場所だと思われていましたね。人と会った時に「どこに住んでいるの」と聞かれて、私が「コリアタウンだよ」と答えると、相手はいつも「危ない場所じゃない？」と聞き返してきました。これまで何度もそうした声を耳にしてきましたが、今のコリアタウンは昔とは違います。ええ、私の友達や同僚の多くは、コリアタウンは本当に粋で人気のある場所だと思っています。ですので、よりヒップな場所に変わってきたということです。家賃も安くないと思われていますよ。以前なら家賃の安さを理由にコリアタウンへ越してきた人もいました。でも今はそういうことはないでしょう...

それでは、この新しい移民集住地区型のジェントリフィケーションの過程において、移民のジェントリファイヤーはどのような経験をしてきたのだろうか？その点に関する重要な要素は、そうした移民のジェントリファイヤーが郊外での生活から撤退し、コリアタウンの利便性や多様性の恩恵を享受しようと考えている点にある。ある移民のジェントリファイヤーは次のように語っている。

> 年齢を重ねるにつれて、利便性が生活にとって最も大事なんだと思うようになりました。コリアタウンはまさにその条件を満たしています。子どもたちはもう成人しているので、教育について何か心配する必要はありません。コリアタウンには良い教育システムがありませんが、その点も特に気にする必要はありません。私の子どもたちは、今の家からそれほど遠くないところに住んでいます。また、車を運転しなくても、この街では韓国関連の文化や娯楽に簡単に触れることができます。さらに、衛星アンテナを買わなくても、家では韓国のテレビ番組を見ることができます。家でそうした番組を見るために、余分に料金を支払う必要もありません。

そして、多様性の実現が追求されてきた結果、韓国とアメリカの文化が混ざり合ったハイブリッドな状況が生まれている。

> コリアタウンと私の出身地では、文化、食べ物、言語、人、考え方などに関して様々な違いがあります。言ってしまえば、コリアタウンは「韓国」と「アメリカ」のどちらでもないということです。

コリアタウンで暮らす移民のジェントリファイヤーの経験はロサンゼルスに根差しており、必ずしも多国籍なものであるとは限らない――また、マイアミのキューバ人がそうであるように、アメリカと韓国を行き来しているジェントリファイヤーは少数で、調査対象者の中でも毎年韓国に帰省している人は20%にも満たなかった。民族的な多様性を好む価値観は調査対象者の間で共通しており、コリアタウンがチャイナタウンのような単一民族の地区ではないという事実が特に重要視されている。しかし、皮肉なことに、新築高層マンションの入居者の90%以上

が韓国人となっている。

> 民族的な多様性が都市の価値の向上につながります。コリアタウンはチャイナタウンのような発展の仕方をしてはいけません。チャイナタウンでは、中国人以外の民族は住みにくくなっています。多様性によって様々なことが改善されます。

> 多様性はコリアタウンにとってプラスに働いていると思います。ここは韓国ではありません。もし、韓国人だけがこの街の唯一の民族であると頑なに主張し、コリアタウンで他の民族の人と一緒に暮らすのが嫌だと言うならば、韓国に帰ればいいんです。

そして、多様性を求める価値観は、既にジェントリフィケーションによって立ち退きが生じているという懸念と衝突した。つまり、さらなる多様性の実現を求めていく思考というのは、ある移民集団が別の移民集団を排除していく状況と密接に関連しており（Sims, 2016）、コリアタウンの場合はラテンアメリカ系の人びとが排除の対象となった。

> ジェントリフィケーションが元々暮らしていた住民を押しのけている事実は認めます。私が今住んでいる地域には、以前はラテンアメリカ系の人がたくさんいました。しかし、今は以前ほどラテンアメリカ系の人を見かけなくなりました。

> 不法移民が一番苦しむことになります。私が低所得者向け住宅を提供するにしても、納税申告書や低所得者であることを証明する書類を持った市民でなければいけません... 仮に、37世帯を立ち退かせることになった場合、そのうち10世帯が不法移民だったらどうでしょう... 彼ら彼女らは戻ってくることはできません。それが最大の懸案事項です... 低所得者向け住宅を必要としている不法移民たちは一体どうなってしまうのでしょうか？

4．結論

Shin et al（2016: 456）は、「既存のジェントリフィケーション研究は、ジェントリフィケーションが他の都市変容プロセスとどのように関連し合っているのかという点には十分な注意を払わず、ジェントリフィケーションの形態を特定することに終始してきた」と指摘している。本章ではジェントリフィケーションと移民を接合し、ジェントリフィケーションと移民の関係性に関して、既に確立されているものと新しく姿を見せつつあるものが入り混じっている状況について検討してきた。本章で提示した５つの類型は、ジェントリフィケーションの段階モデルに基づいており、移民とジェントリフィケーションという２つ事象の特異な軌跡を示している。そのため、様々な発見を促すツールとして大きな価値を有している。そして、コリアタウンの事例研究では、検討対象とするジェントリファイヤーを、1980年代から1990年代にかけて多くの研究において分析対象とされてきた若い専門職層から、存在が目立つ移民に加えて、50歳以上の人びと、子どもが独立し親だけとなった家庭、移民集住地区の新築マンションに再投資を行っている人びとにも押し広げることができた。コリアタウンの移民集住地区におけるジェントリフィケーションは、アジアから持ち込まれたモデル（Shin et al, 2016）と北米のモデルのハイブリッドとなっており、都市変容に概ね無干渉な州において新築物件の建設・セグリゲーション・立ち退きを引き起こしている。また、コリアタウンの事例は、新しいアジア型のジェントリフィケーションがグローバルノースの都市、とりわけロサンゼルスのようなジェントリフィケーションが依然として初期段階で包容力の高い都市へと転移していく可能性を部分的に示している。

なお、５つの類型の中でも５つ目のカテゴリーに関しては、その詳細が部分的に論じられることもあったが、最初の４つのカテゴリーがグローバルサウスの都市を対象として検討されるケースは稀である。グローバルサウスの都市においても、階級的分極化・再投資・立ち退きを伴うジェントリフィケーションが確認されているにもかかわらず、こうした分類に基づいた検討は進められていない。比較検討をとり入れ、幅広い視野を持つことによって、グローバルノース型のジェントリフィケーションから脱却し、初期段階のジェントリフィケーションに関するオルタナティブな理解にもつながっていくだろう。最後に、ジェントリフィケーションと「人種」に関する考え方に話を戻すと、通常、グローバルノースの移民は、マジョリティとなっている集団やその集団に属するジェントリファイヤーとは「人種」が異なっている――だからこそ、様々な場所で行われている実践や社会下層部の動向に由来するグローバリゼーションを考慮に入れて、移民に関する議論を進めていく必要がある。また、人種に焦点が当てられ、ある種の社会問題として捉えられている移民もいれば、そうでない移民もいる。そのため、移民は人種とジェントリフィケーションの関係性を一層複雑化させる要素の１つとなっている――ジェントリフィ

ケーションに対して頑なに抵抗したり、従属的であるがゆえに立ち退きにあったり、移民がジェントリフィケーションを制御する立場につくこともある。実際、最初の４つのカテゴリーでは、少なからず軽蔑されている移民――ジェントリフィケーションの防波堤となるほどにスティグマ化されていたり、立ち退きの対象として存在が軽視されたりしている移民――に焦点が当てられていたのに対し、５つ目のカテゴリーでは、特定の移民がジェントリフィケーションの先導者として捉えられている。

参考文献

Atkinson, R. and Bridge, G. (2005) *Gentrification in a Global Context: The New Urban Colonialism*, London: Routledge.

Benton-Short, L., Price, M. and Friedman, S. (2005) Globalization from below: the ranking of global immigrant cities, *International Journal of Urban and Regional Research*, 29(4), 945-959.

Betancur, J. (2002) The politics of gentrification: the case of West Town in Chicago, *Urban Affairs Review*, 37, 780-814.

Boyle, P. (2009) Migration, in Kitchin, R. and Thrift, N. (eds) *The International Encyclopedia of Human Geography*, London: Elsevier Press, 96-107.

Brown, K. and Wyly, E. (2000) A new gentrification? A case study of the russification of Brighton Beach, New York, *The Geographical Bulletin*, 42(2), 94-105.

Butler, T. (2003) Living in the bubble: gentrification and its 'others' in North London, *Urban Studies*, 40(12),2469--2486.

Caldeira, T. (2000) *City of Walls: Crime, Segregation and Citizenship in Sao Paulo*, Berkeley, CA: University of California Press.

Castells, M. (1983) *The City and the Grassroots*, Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press.

Chang, T.C. (2016) 'New uses need old buildings': gentrification aesthetics and the arts in Singapore, *Urban Studies*, 53(3), 524-539.

Clerval, A. (2013) *Paris sans le people: La gentrification de la capitale* (Paris without the people: The gentrification of the capital), Paris: Découverte

Clerval, A. and Fleury, A. (2009) Politiques urbaines et gentrification, une analyse a partir du cas de Paris, *L'Espace Politique*, 8, 33-46.

Data Quick Corporation (2013) Custom zip code report for zip codes 90004, 90005, 90006, 90010, 90020.

Davidson, M. (2007) Gentrification as global habitat: a process of class formation or corporate creation? *Transactions of the Institute of British Geographers*, 32, 490-506.

Deener, A. (2012) *Venice: A Contested Bohemia in Los Angeles*, Chicago, IL: University of Chicago Press.

DeVerteuil, G. (2011) Survive but not thrive? Geographical strategies for avoiding absolute homelessness among immigrant communities, *Social and Cultural Geography*, 12(8), 929-945.

DeVerteuil, G. (2012) Resisting gentrification-induced displacement: advantages and disadvantages to 'staying put' among non-profit social services in London and Los Angeles, *Area*, 44(2), 208-216.

DeVerteuil, G. (2015) *Resilience in the Post-Welfare Inner City: Voluntary Sector Geographies in London, Los Angeles and Sydney*, Bristol: Policy Press.

DeVerteuil, G. (2016) Pace and place: resilience in an age of urban and theoretical churn, *Geoforum*, 68, 69-72.

DeVerteuil, G., Yun, O. and Choi, C. (forthcoming) Between the cosmopolitan and the parochial: the immigrant gentrifier in Koreatown, Los Angeles, in *Social and Cultural Geography*, DOI http://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/14649365.2017.1347955#metrics-content.

Feldman, M. and Jolivet, V. (2014) Back to Little Havana: controlling gentrification in the heart of Cuban Miami, *International Journal of Urban and Regional Research*, 38(4), 1266-1285.

Forrest, J. and Dunn, K. (2007) Constructing racism in Sydney, Australia's largest EthniCity, *Urban Studies*, 44(4), 699-721.

Freeman, L. (2006) *There Goes the 'Hood: Views of Gentrification From the Ground Up*, Philadelphia, PA: Temple University Press.

Gonen, A. (2015) Widespread and diverse forms of gentrification in Israel, in Lees, L., Shin, H. and López Morales, E. (eds) *Global Gentrifications: Uneven Development and Displacement*, Bristol: Policy Press, 143-164.

Ha, S.K. (2015) The endogenous dynamics of urban renewal and gentrification in Seoul, in Lees, L., Shin, H. and López-Morales, E. (eds) *Global Gentrifications: Uneven Development and Displacement,* Bristol: Policy Press, 165-180.

Harris, R. (2015) Using Toronto to explore three suburban stereotypes, and vice versa, *Environment and Planning A*, 47(1), 30-49.

Hilda, H., Di Virgilio, M. and Rodriguez, M. (2015) Gentrification in the city of Buenos Aires: global trends and local features, in Lees, L., Shin, H. and López-Morales, E. (eds) *Global Gentrifications: Uneven Development and Displacement*, Bristol: Policy Press, 199-222.

Hwang, J. (2015) Gentrification in changing cities: immigration, new diversity, and racial inequality in neighborhood renewal, *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 660(1), 319-340.

Keil, R. (1998) *Los Angeles*, London: Wiley.

Krijnen, M and de Beukelaer, C. (2015) Capital, state and conflict: the various drivers of diverse gentrification processes in Beirut, Lebanon, in Lees, L., Shin, H. and López-Morales, E. (eds) *Global Gentrifications: Uneven Development and Displacement*, Bristol: Policy Press, 285-310.

Lees, L. (2000) A re-appraisal of gentrification; towards a 'geography of gentrification', *Progress in Human Geography*, 24(3), 389-408.

Lees, L. (2016) Gentrification, race and ethnicity: towards a global research agenda, *City and Community*, 15(3), 208-214.

Lees, L., Shin, H.B. and López-Morales, E. (2015) Introduction: 'gentrification' -- a global urban process?, in Lees, L., Shin, H.

and López-Morales, E. (eds) *Global Gentrifications: Uneven Development and Displacement*, Bristol: Policy Press, 1-18.

Lees, L., Shin, H.B. and López-Morales, E. (2016) *Planetary Gentrification*, Cambridge: Polity Press.

Lees, L., Slater, T. and Wyly, E. (2008) *Gentrification*, London: Routledge.

Ley, D. (2010) *Millionaire Migrants: Trans-Pacific Lines*, London: Wiley-Blackwell.

Ley, D. and Dobson, C. (2008) Are there limits to gentrification? The context of impeded gentrification in Vancouver, *Urban Studies*, 45(12), 2471-2498.

Ley, D. and Teo, S. (2014) Gentrification in Hong Kong? Epistemology vs. ontology, *International Journal of Urban and Regional Research*, 38(4), 1284-1303.

Li, B. (2013) *Chinatowns Then and Now*, New York, NY: Asian American Legal Defense and Education Fund.

Li, W. (1998) Anatomy of a new ethnic settlement: the Chinese ethnoburb in Los Angeles, *Urban Studies*, 35(3), 479-501.

Light, I. (2002) Immigrant place entrepreneurs in Los Angeles, 1970-1999, *International Journal of Urban and Regional Research*, 26, 215-228.

Lin, J. (1998) Globalization and the revalorizing of ethnic places in immigration gateway cities, *Urban Affairs Review*, 34, 313-339.

May, J. (1996) Globalization and the politics of place: place and identity in an inner London neighbourhood, *Transactions of the Institute of British Geographers*, 21, 194-215.

Murdie, R. and Teixeira, C. (2011) The impact of gentrification on ethnic neighborhoods in Toronto: a case study of Little Portugal, *Urban Studies*, 48(1), 61-83.

Nijman, J. (2007) Mumbai since liberalization: the space-economy of India's gateway city, in Shaw, A. (ed) *Indian Cities in Transition*, New Delhi: Orient Longman, 238-259.

Pattaroni, L., Kaufman, V. and Thomas, M. (2012) The dynamics of multifaceted gentrification, *International Journal of Urban and Regional Research*, 36, 1223-1241.

Peck, J. (2006) Liberating the city: between New York and New Orleans, *Urban Geography,* 27(8), 681-713.

Pogash, C. (2015) Gentrification spreads an upheaval in San Francisco's Mission District, *New York Times* 22 May.

Reckard, S. and Khouri, A. (2014) Wealthy Chinese home buyers boost suburban LA housing markets, *Los Angeles Times* 24 March.

Rogerson, C. and Rogerson, J. (2015) Johannesburg 2030: the economic contours of a 'linking global city', *American Behavioral Scientist*, 59(3), 347-368.

Sakizlioglu, N. and Uitermark, J. (2014) The symbolic politics of gentrification; the restructuring of stigmatized neighborhoods in Amsterdam and Istanbul, *Environment and Planning A*, 46, 1369-1385.

Sequera, I. and Janoschka, M. (2015) Gentrification dispositifs in the historic centre of Madrid: a reconsideration of urban governmentality and state-led urban reconfiguration, in Lees, L., Shin, H. and López-Morales, E. (eds) *Global Gentrifications: Uneven Development and Displacement*, Bristol: Policy Press, 375-393.

Shin, H.B. (2008) Living on the edge: financing post-displacement housing in urban redevelopment projects in Seoul, *Environment and Urbanization*, 20(2), 411-426.

Shin, H.B. (2009) Property-based redevelopment and gentrification: the case of Seoul, South Korea, Geoforum, 40(5), 906-917.

Shin, H.B., Lees, L. and López-Morales, E. (2016) Introduction: locating gentrification in the Global East, *Urban Studies*, 53, 455-470.

Sigler, T. and Wachsmuth, D. (2016) Transnational gentrification: globalisation and neighbourhood change in Panama's Casco Antiguo, *Urban Studies*, 53(4), 705-722.

Sims, R. (2016) More than gentrification: geographies of capitalist displacement in Los Angeles 1994–1999, *Urban Geography*, 37(1), 26-56.

Slater, T. (2006) The eviction of critical perspectives from gentrification research, *International Journal of Urban and Regional Research*, 30, 737-757.

Snow, D. and Anderson, L. (1993) *Down on Their Luck: A Study of Homeless Street People*, Berkeley, CA: University of California Press.

Stabrowski, F. (2014) New-build gentrification and the everyday displacement of Polish immigrant tenants in Greenpoint, Brooklyn, *Antipode*, 46(3), 794-815.

US Census (2010) Demographic profile of census tracts in Los Angeles County, Washington DC: US Census.

Van Criekingen, M. and Decroly, J. (2003) Revisiting the diversity of gentrification: neighbourhood renewal processes in Brussels and Montreal, *Urban Studies*, 40(12), 2451-2468.

Vicino, T., Hanlon, B. and Short, J. (2011) A typology of urban immigrant neighborhoods, *Urban Geography*, 32(3), 383-405.

Walks, A. and August, M. (2008) The factors inhibiting gentrification in areas with little non-market housing, *Urban Studies*, 45, 2594-2625.

Walks, A. and Maaranen, R. (2008) Gentrification, social mix, and social polarization, *Urban Geography*, 29(4), 293-326.

Winders, J. (2009) Race, in Kitchin, R. and Thrift, N. (eds) *The International Encyclopedia of Human Geography*, London: Elsevier Press, 53-58.

Wyly, E. (2015) Gentrification on the planetary urban frontier: the evolution of Turner's noösphere, *Urban Studies,* 52(14), 2515-2550.

監訳者付記

翻訳に際しては、上田光希と朱澤川が分担してベースとなる翻訳作業を進め、監訳者である松尾卓磨が全体的に訳文を整える作業を行った。そのため、万が一翻訳内容に誤りがあった場合には、監訳者で

ある松尾卓磨がその責任を負う。なお、訳出にあたっては、監訳者の判断で原論文の章番号にあたる「25」を割愛して章節番号と表番号を表記している。本稿はJSPS特別研究員奨励費（研究代表者：松尾卓磨、課題番号：18J23295）を利用した研究成果の一部である。